

ジョーゼフ・W・フレッツ『パラグアイにおける集団移民』

Joseph Winfield Fretz, *Immigrant Group Settlements in Paraguay,
A Study in the Sociology of Colonization,*
Bethel College, North Newton, Kansas, 1962, 194 pp.

「数百万エーカーの可耕地を持つラテン・アメリカが過去数世紀にわたり北米で見られたように、ヨーロッパやアジアの移民をひきつけることが出来なかったのは何故か？」という疑問がしばしば提起されているが、パラグアイにおける集団移民の経過ならびに実態の社会学的検討を通して、この問題を解明してみようというのが著者の意図である。

ところで問題は理論的ならびに実際の二つの側面に分けられる。著者の理論的関心は、集団移民の成功条件は如何ということであり、また実際の関心は、ヨーロッパおよびアジアの移民グループについて、それらの植民の経過および問題点に関する社会学的データを蒐集し、将来の移民可能性を検討することに向けられている。

集団移民が成功するための条件としてフレッツがあげているのは、「1. 移住者がそうしたいとのぞんだばあいにはコロニーをなして植民することが許される。2. 集団移住者のグループが自己独自の文化を存続し、やがてそれが国全体の宝となるような形の発展が可能である。3. 植民した各人種集団が、その成員の個人的ならびに社会解体傾向を阻止する力を持つようになる。4. 自己独自の下位文化を発展させる自由を与えられた各人種集団が、やがて国民文化に同化するに至る。」(序文)といった四つの条件である。そしてこのような理論的設定の当否の検証をも併せて、パラグアイへの集団移民の成功例と不成功例の検討が行なわれる。その結果コロニーの組織化の程度およびその効率が集団植民の成功不成功を決定する大きなカギになっていることを明らかにし、成功した集団植民のケースとして、チャコのアノニート・コロニーの一つであるフェルンハイムの社会体制の社会学的検討が行なわれる。そして序文にあげた四つの理論的条件を満たすような凝集力の強い集団形成がなされたばあいのみ、パラグアイのような移住地域での移民が成功しようと著者は結論する。

本書の理論的特色は社会学的分析視角に立っての移民問題の検討ということに求められよう。ことに移民集団を一つの社会体制として把握する見方は、従来の移民研究には見られない理論的視角を新たに提供したものである。

このように移民問題研究についての新しい社会学的枠組の提示というだけでなく、その結論の実際的な意義もまた非常に大きなものがある。フレッツはパラグアイにおける開拓移民の成功要件として、集団の社会学的組織が如何に大きな役割を果しうるかを明らかにした。

勿論フレッツの見解のうち、いくつかの点については異論が提起されよう。たとえば彼が集団移民の成功要件と考える集団の凝集力のつよさは、外部社会に対する閉鎖性をともないがちであり、移住先の文化への同化が遅れざるを得ない。事実彼がもっとも成功したケースと考えているチャコの三つのアノニート・コロニーは、パラグアイ人との接触同化という点でもっとも遅れていたことは彼自身が指摘している。これが将来カナダで起ったような社会的摩擦の源とならないとは言いきれない。移民同化の問題はフレッツのような楽観論では片付けられない複雑な様相をもっている。

また彼は集団移民成功の社会学的要件を追求するに熱心であったため、その経済的要件を閉却してしまったのではないかという疑問も生ずる。特にアノニート・コロニーの成功は特異な宗教的信仰を紐帯とする強固な集団的まとまりと組織によって支えられているとはいえ、外部よりの援助、特にMCC(アノニート中央委員会)の物心両面にわたる強力な援助も無視できない要件である。MCCからの寄附額は200万ドル以上にもほり、チャコの三つのコロニーが誇りとする教育施設・保健衛生設備・経済的諸施設もこれらの援助によって実現されたのである。

しかしながらフレッツの寄与は、これらの個々の欠点を補って余りあるもので、我々は本書から移民問題に関する多くの理論的・実際的示唆をくみとることができる。

(皆川 勇一)